

ずれたり、かみの毛がぬけたりします。そうになると、男女の区別もつかないみにくい顔になってしまいます。「人には見られたくない。」「見るのもこわい。」と思われる病を治りやまいようする医者になろうと決心したことは、「ふつうの医者になるな。」という父の言葉が、いつもケサの心に根強くあつたからです。

ケサは、女医のしかくを持ちながら、東京の慈善病院でかんご婦としてつとめました。かんご婦の仕事は、病人を相手にするには、大切な仕事と考えたからです。そこで、かんご婦の三上みなかみ千代子とめぐり会いました。

千代子は、ケサより少し若い人ですが、ライカン者のために何かをしてあげたいと思っていたクリスチャンでしたから、二人の心は、よくにっていました。

二人は、生きる希望をなくしたライ病の人たちに、「神が、あなたを守っていますよ。そして、わたしも、あなたの友だちなのです。」といつて、くずれかかった手をにぎってはげました。

ある年、イギリスのコンウィール・リーという貴婦人が日本をたずねてきまし